全盲佐々木さん 万感完走

トライアスロン中島 ガイド浅井さんと

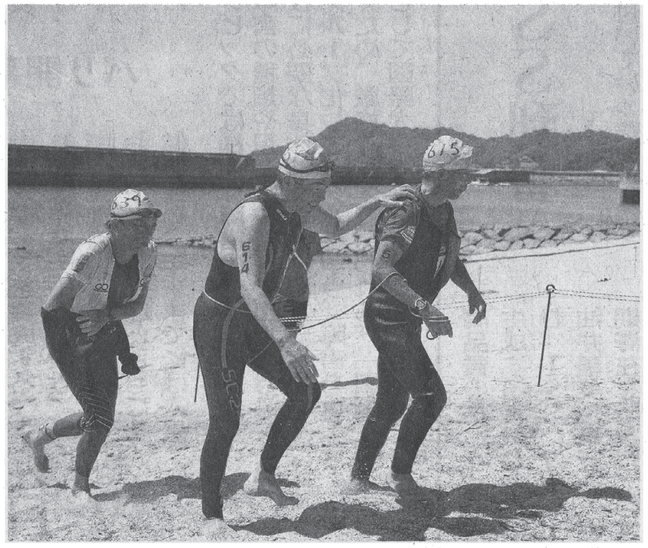
松山市の離島・中島で「トライアスロン中島大会」（松山市など主催）が27日開かれ、全盲の佐々木一明さん(62)（八幡浜市）が初挑戦した。無事に完走を果たした佐々木さんは「ゴールできてホッとしたし、達成感もある」と喜んだ。

同大会は20～83歳の約320人が出場し、スイム1・5キロ、バイク40キロ、ラン10キロのタイムを競った。

佐々木さんは視覚障害者で唯一参加。4年前からともに練習に取り組んできたガイドの浅井裕史さん(55)と個人の部に出場し、他にも仲間のサポートを受けながらゴールを目指した。

午前10時半頃、合図とともに健常者と一斉にスタート。最初のスイムでは、浅井さんと互いの体をロープで結んで泳いだ。バイクでは、サドルとハンドルが2か所ある「タンデム自転車」に乗って颯爽と進んだ。午後は気温が上がってランで苦戦したが、午後2時10分頃、家族に迎えられてゴールテープを切った。

浅井さんは「色んなことが思い出されて感動した。上出来です」と目を潤ませ、佐々木さんは「また挑戦したい」と話した。二人は「楽しみましたな。お世話になりました」と固く握手を交わした。



上スイムを終え、海から上がった佐々木さん（左から2人目）ら 下家族に迎えられてゴールする佐々木さん（右から2人目）と浅井さん（右端）（いずれも松山市で）

【読売新聞 2023年8月28日掲載】

佐々木さんがトライアスロンチャレンジの夢を口に出し、浅井さんのサポートを受けて4年の月日が流れました。実行委員会の方々との交渉もしながら進めてきたプロジェクト。今回大西さん・真木さん・森さん・3名の鉄人のサポートをお願いして安全確保にも努めての出場でした。みんなで力を合わせて勝ち取ったゴールの瞬間の感動は一生の宝物となりました。

次回から、無条件で視覚障がい者が参加できるということではないということですが、「事なかれ主義の愛媛*」で新たな扉を開けてくださったことに感謝です！　＊愛媛県誕生150年・・・2023年2月20日愛媛新聞記事より引用

鉄人 全盲62歳挑む

八幡浜・佐々木さん きょう中島大会

大会に向けてランニングに励む佐々木さん（左）と浅井さん（八幡浜市で）

松山市の離島・中島で27日に行われるトライアスロンの大会に、還暦を過ぎた視覚障害者が初めて挑戦する。全盲の佐々木一明さん(62)（八幡浜市）は誘導役と4年間、文字通り二人三脚で練習に励んできた。本番を前に、「自分の限界を試したい」と意気込む。（丹下巨樹）

佐々木さんは21日、ガイドの浅井裕史さん(55)と八幡浜市でバイクとランの練習を行った。バイクはサドルとハンドルが2か所ある「タンデム自転車」を使い、競技歴30年を超える浅井さんがハンドルを操作する。佐々木さんは「僕の癖は全て把握してくれている」と信頼を寄せた。

トライアスロン中島大会（松山市など主催）は1986年に始まり、今年はコロナ禍の影響で4年ぶりに開催される。島内を会場とし、参加者約300人がスイム1・5キロ、バイク40キロ、ラン10キロの合計タイムを競う。佐々木さんの申し込みを受け、視覚障害者の参加を認める競技規則が追加された。

参加する視覚障害者は佐々木さんだけで、健常者と一緒にスタートする。レース中は3人のボランティアが佐々木さんを囲むように泳ぐなどしてサポートする。

佐々木さんは目の網膜に異常が出る進行性の「網膜色素変性症」を生まれながらに抱える。中学時代に始めた視覚障害者の野球競技「グランドソフトボール」を43歳まで続けたが、病気の進行で光も見えなくなった。「覚悟はしていたけどやっぱり悔しい」。スポーツから離れ、鍼灸師の仕事や子育てに没頭した。

転機は10年ほど前。外出支援サービスを受けられるようになり、水泳を始めた。タンデム自転車の普及を通じて障害者支援に取り組むNPO法人「タンデム自転車NONちゃん倶楽部」（松山市）の活動に参加し、サドルにまたがると、「風を感じてワクワクした」。パラトライアスロンに興味を持ち、浅井さんと知り合ったという。

練習4年「限界試す」

最初は簡単ではなかった。パラ競技者の動画を参考にして歩幅や走り出す足をそろえる練習を繰り返した。スイムではガイドと体を結ぶロープが引っかからないよう試行錯誤を重ねた。

62歳での初挑戦。コロナで大会が開催されなかった時期も週1回の練習は欠かさず続けてきた。「トラブルがなければ必ず完走できる」と浅井さん。佐々木さんは「サポートがあったからこそ続けられた。ゴールして感謝の気持ちを伝えたい」と話している。

パラトライアスロン 高まる注目

パラトライアスロンへの注目は年々高まっている。競技者としては視覚障害者のほか、車いすを使う「座位」、上半身に障害がある「立位」が想定される。2021年の東京パラリンピックでは、事故で右腕を失った宇田秀生選手が銀メダルを獲得した。

日本トライアスロン連合（ＪＴＵ）によると、パラトライアスロンのカテゴリーを設けているのは、国内の公認大会では10大会ほど。横浜で11年、トライアスロンの世界選手権と併催されたのが公認大会では日本初の大会で、男女４選手が出場した。国内では現在、約100人の競技者がいるとされる。

ただ、障害者が出場できる大会は限られているのが実情だ。例えば、階段があるコースには車いすの選手は参加できない。選手を補助するスタッフ不足などの課題もあるという。

ＪＴＵの担当者は「体制を整えるにはやはり費用がかかる。希望するすべての障害者が参加できるよう、方策を模索していきたい」と話した。

【読売新聞 2023年8月27日掲載】